介護新聞2008年12月11日

花凪屋繁盛記

連載6

人と人とがつながって

NPO法人在宅生活支援
サービスホーム花凪

木村美和子理事長

嵐の前の静けさ

TさんとKさんの下宿人コンビは、一緒に暮らす日が増えるほどにどんどん息も合ってきました。いつの間にかTさんもみんなと一緒に朝食の席を囲むようになり、花凪下宿の混乱は収束に向かっていました。今振り返ると、それはつかの間の安息にすぎなかったのです。なぜかというと、三人目の下宿人となったSさんは先住者お二人に優るとも劣らない個性的な人だったからです。

ある日、Kさんの担当だったケアマネから電話がありました。内容は「同居している息子さんが入院した後、一人で住んでいるSさんという八十二歳の女性を、ショートステイで受け入れてもらえないだろうか?」というものでした。

加えると、認知症で生活全般にわたり常時介護が必要な状態にもかかわらず、ご本人は「他人の手は借りたくない。家から出るのもイヤ」と言い続け、周りの説得に断固として応じないということでした。

「どうしようか?」と少々考え、「一度お会いします」と答えた時には、私の中でSさんは三人目の下宿人になっていました。それでも、一緒に住むことになるのだからと「花凪家族会議」を早速開催しました。

夫と娘は異存なしで当然でしたが、TさんとKさんが「連れてこい。かわいそうだ」と言ったのには、嬉(うれ)しいというよりは驚きでした。「そうか、そうか、そうなんだ」と心の中でうなずきました。

お二人とも自分のことでいっぱいで、自己主張の固まりだったのに、ほかの人のことを思いやる言葉を口にしたのです。その上、この下宿を自分の家と思っているからこそ「連れてこい」という言葉が出たのです。

確固たる考えがあったわけではなく、言うなれば「成り行き」で始まった下宿でしたが、「何となるものなのだな~」

と、私はまたまたお気楽に感心したりなどしていました。繰り返すと、この後、どんなドタバタがこの下宿で起きるのかを予想もせずに……。

3人のエネルギーに乾杯

「花凪家族会議」の翌日、Sさんは下宿にやってきました。ご本人が「生きていると思い込んでいる」、ぬいぐるみの犬「コロちゃん」も一緒でした。早速、気遣いの名人Kさんが、

「かわいいぬいぐるみだ」

とSさんに話しかけると、

「この子は私が産んだ子供です。私の次男です!」

ギョッとしたKさん。

イラスト・木村玲

「おめぇ、変だ。それは死んでるぞ!」

「死んでなんかいません。コロや、ほえてごらん」

というやりとりが延々続きます。そのうち、「フン」という表情で高見の見物を決め込んでいたTさんに火の粉が降りかかり、三つ巴(どもえ)の言い争いが始まります。思い返すと、下宿人が二人になった時から、暴力に発展しそうな時や、ここまで言わせてはいけないと私が思ったとき以外は、言い争いを止めることはしませんでした。

「だって、面白いんですもの」というのが、止めない理由でした。私が止めてしまうと、それは私の判断でしかなくて、下宿人たちの考えや判断ではないわけです。黙って聞いていると、みなさんそれなりに言い分があるのだなという当たり前のことに気づきます。

そして、自分の役割にも気づいていくのも分かりました。Kさんは調停役。Tさんはシブシブ納得をするフリをする役。Sさんは突然物分かりの良い人になる役。初日、初めての言い争いの最後には、三人でコロちゃんをなでていました。

こんなことがあったので、Sさんが本来なら言うはずであろう「家に帰ります」の帰宅願望も出ず、三人はグッと距離を縮めてしまいました。図らずも、素敵な歓迎会が催されてしまったのです。こんな良い光景を見せてもらえるのだから、言い争いを止めるわけにはいかないのです。

その日の夜に…

その日の夜「部屋を真っ暗にしないと眠れない」というSさんの希望を聞いて、下宿人は午後七時に床につきましたが、私はロウソク一本で本を読んでいました。状況を知らぬ夫が帰宅したのはそんなとき。ロウソクに照らされる般若(はんにゃ)のごとくの妻の顔に仰天。毎日が驚きの連続で、次第に肝がすわってきた夫でしたが、不本意にも久しぶりに恐怖を味わってしまいました。

その恐怖が覚めやらぬうちに夫は、新しい下宿人にご対面しようとSさんの顔をのぞき込んで、再び恐怖に襲われました。何と!

Sさんが寝ていると確信してのぞき込んだ枕に頭をのせていたのは、コロちゃんだったのです。夫の悲劇はさておいて、「そんなにコロちゃんがかわいいのね」と深く感じ入ったその夜の私でした。